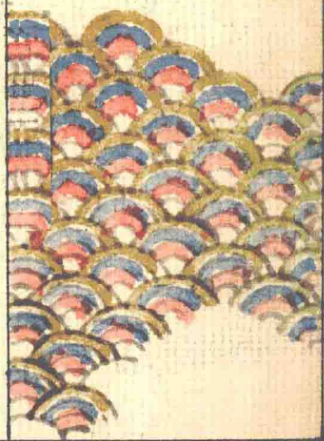


私家版

日本語文法

井上ひさし



新潮社



私家版 しかばん にほんごぶんぽう
日本語文法

昭和五十六年三月二十五日 発行
昭和五十六年五月二十五日 八刷

著者 井上ひさし

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務三(三六)五一 振替東京四一八〇八
編集三(三六)五四

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

定価九二〇円

© Hisashi Inoue 1981 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

枕ことば 7

擬声語 13

格助詞「が」の出世 19

ガとハの戦い 26

時制と体制 34

受身上手はいつからなのか 40

形容詞の味 47

自分定めと縄張りづくり 54

ナカマとヨソモノ 61

論より情け 68

尻尾のはなし 75

漢字のなくなる日 81

漢字は疲れているか 88

漢字とローマ字 94

振仮名損得勘定 ルビはそんなとくかまかんがえる 101

句点と読点 マル テン 108

句読点なんか知らないよ 115

区切り符号への不義理 122

……台の考察 129

晴れたりくもったり所により雨 136

一筆啓上、敬語はまだまだ元気でござる 144

恩の売り買い 151

敬語量一定の法則 158

n音の問題 165

素人の 古典まなびの 七五調

172

2n+1 179

ふたつの仮名づかい(ひ) 186

正書法序論 193

日本語は七通りの虹の色 199

ウソについての長いまえがき 207

話半分、嘘半分 214

外来語について 220

「のだ文」なのだ 228

コンピュータがねをあげた 235

目次

枕ことば 7

擬声語 13

格助詞「が」の出世 19

ガとハの戦い 26

時制と体制 34

受身上手はいつからなのか 40

形容詞の味 47

自分定めと縄張りづくり 54

ナカマとヨソモノ 61

論より情け 68

尻尾のはなし 75

漢字のなくなる日 81

漢字は疲れているか 88

漢字とローマ字 94

ルビはそんなとくかきかんがえる
振仮名損得勘定 101

マル
句点と読点 108

句読点なんか知らないよ 115

区切り符号への不義理 122

……台の考察 129

晴れたりくもったり所により雨 136

一筆啓上、敬語はまだまだ元気でござる 144

恩の売り買い 151

敬語量一定の法則 158

n 音の問題 165

素人の 古典まなびの 七五調 172

25 + 1 179

ふたつの仮名づかい (ひ) 186

正書法序論 193

日本語は七通りの虹の色 199

ウソについての長いまえがき 207

話半分、嘘半分 214

外来語について 220

「のだ文」なのだ 228

コンピュータがねをあげた 235

私家版 日本語文法

枕ことば

だれかに、中学と高校での国文法の授業についてなにか短い感想を求められたら（困惑した、退屈した、そして恐しかった）と答えれば、なにやらびたりと嵌まる。

まず困惑は、最初の時間に教師が「正しく日本語を書き、きれいな標準語を話すためにも、みなさんは文法というものをしっかりと身につけなければなりません」と語ったときにはじまった。となると母親から口移しにおそわった自分たちの言葉はどうなるのだろう。母親の言葉はまちがいで、その上、汚いのか。教師たちは声をそろえて父母に孝養をつくすようにと教えてくれたが、それとこれとをどう折り合いをつければいいのか。母親に孝行を心掛ければ母親の言葉を汚いときめつける日本語文法は右から左へと聞き逃した方がいいのか、あるいは不孝は覚悟の上で文法を学ぶか。態度を決めかねているうちに高校に進んだが、あるとき教師が「わたしの立場としては形容動詞なるものを認めることはできない。しかし教科書はこれに一章をあてているのでひと通り説明しておこう。さて、いわゆる形容動詞とは……」とはじめてから、なんだばかばかしいとおもった。母親の言葉を（方言）と呼び、汚物扱いしていた国語が、そしてそれを支えている文法がそんなにあやふやなものだったのか。それならこっちらから願ひさげだ。以後はもっぱら居眠りをしてすごした。いま思えばその教師は熱心な文法家で、

たとえば山田(孝雄)文法のエッセンスを「動詞は事物の性質や状態が運動したり発展したりするところを捉えて表わす用言で、形容詞は事物の性質や状態が静止し、変化しないあり方を表わす用言である」などと口当りよく碎いて与えてくれたが、こちらは「だからどうした」「へえ、それで」と低声のにくまれ口、もつとも大学入試が近づくにつれ様子が変わり「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の」は次の「長長し」を引き出すための序で、「あしびきの」は「山の枕詞、山鳥の」の「の」は連体修飾格の格助詞……と丸暗記をはじめた。理解できないことを暗誦するのだからこれは苦行で、加えて音韻体系は別として自分が日ごろ常用する南奥方言とほとんど同じ言葉に関する文法が英文法よりもはるかに難しいことに気づいて、自分はほんとうに日本人なのだろうかと不安になった。

怠け者の自己弁護、さもなくばズーゾー弁圈出身者のひがみ、どちらととってくださってもよろしいが、文法授業の初期に、いわゆる日本語とわたしたちの常用語との境目あたりについて、一時間でいいからなにか説明があればもっと日本語文法に興味を持てただろうとおもう。たとえば南奥方言の形容詞「赤い」は、

あげん [age:-be]

あげがいた [age:-gaqta]

あげえべ [age:-3ga]

あげ [age:-]

あげ [3ga]

あげえば [age:-ba]

と活用するが、それぞれの活用形がすべて終止の形「[3ga]」を含んでいる、これは形容詞

がひとつの形にまとまって行く傾きがあることをあらわしており、つまりわれわれの常用語では形容詞は無活用化に向って進んでいるわけだ。それにひきかえいわゆる日本語では……といった塩梅におそわっていたらすこしは事情が変っていたかもしれない。すくなくともそう困惑せずにすんだだろう。そんなわけで入学試験が終るやいなや文法書を紐でくって古本屋へ持って行ったのだが、ちかごろは逆に古本の文法書を買いあさって歩いている。理由はいくつかあるけれども、ひとつは柳田國男（一八七五—一九六二）のいう〈形容詞飢饉〉のせいである。

この百年間に西欧文明が洪水のように日本へ流れ込んできた。誤解をおそれずに粗っぽくいえば文明とは名詞の一大集団のことであるから、たちまちこの島国は横文字を漢語に移しかえた名詞で溢れてしまった。その証拠にどんな国語辞典でもいい、任意の一頁をごらんください。

半分近くが名詞で占められているはずだから。ところがその名詞の数に見合うだけの動詞や形容詞が入ってこない。接続詞の移入は皆無にひとしい。そこで名詞以外の品詞が品切れになったわけである。とりわけ形容詞はものの性質や状態が静止し、変化しないあり方を表わすのだから、それはどうしても使用者の感覚に依らざるを得ない。またしても誤解をおそれずにいえば外国から日本人を移入しなければ（むろんこんなことは不可能であるけれども）、形容詞なぞふえっこないだろう。日本人の使った形容詞でないと日本人にはぴたりとこないのである。

このようなとき、わたしたちはどんな次善の策を講じるのだろうか。第一に英語やフランス語の形容詞を日本語に移しかえるのをやめ、そのまま片仮名で使う。たとえば昭和四十年に日清紡は新聞に次の如き広告を出した。

すてき　美しい　粋な　におやかな　fancy　すずし　知性的な　しとやかな　wonder-

full エキゾチック 優雅な きれい fresh ぜいたく 誇らかな 清楚な 花の精のよ
うな 純粹な わかわかしき fantastic はなやかな あこがれの dressy 女らしい
神秘的 charming さわやかな あでやかな 気品のある 華麗な high-sense しやれ
た 思ひ出の かるやかな romantic 魅惑的な 都会的な fashionable de-luxe 晴
れやかな 洗練された gorgeous きやしやな 宝石のような elegant moody jolly
上品な 幸せな 愛らしい——

ローヤルレース

エキゾチックというのが一個出てきたが、このように舶来品を片仮名で使う手はないでもない。下手をするとペダンチックで、なにやらスノビッシュで、どうにもイデオチチックで、この文章みたいになつてしまうから、この手の形容詞はなるべくなら願ひ下げにしたい。

第二の方法は、二字繋ぎの漢語に「ナ」をつけるやり方で、右の例文では「優雅な」や「清楚な」がそれに当る。だがこれはどうも安易な、安直な、手軽な感じがする、ちょうどこの文章のように。

第三の方法はやはり二字繋ぎの漢語に「……的」なる^{オノマトペ}的をぶらさげて形容詞をつくるという、本邦の知識人から積極的、圧倒的、絶対的、驚倒的、信仰的、神懸的、盲目的支持を受けているやり方だが、連続的、集中的、持続的使用をするときこの文章のように知性的を瞬間的に通り越し痴呆的の作文になつてしまうので、良心的物書きはこの手の形容詞に警戒的、消極的態度をとらざるを得ない。そこでもっと本来的な形容詞を、より感覚的で、喚起的能力のある、本格的（どうも癖が抜けぬ、こういうのを末期的と称する）形容詞がないものかと考え、それ

にはやはり文法的知識を精力的に導入しなければと四十の手習、文法書をぼちぼち集めだしたところなのだ。おかげで名詞に、〈……ぼい〉や〈……くさい〉や〈……らしい〉を連ならせればどうやら日本語っぽい、やまとことばくさい、母国語らしい形容詞をつくることができそうな気配になってきたけれども。

ところで柳田國男の『國語の將來』によると、明治以前においても形容詞はすくなかつたらしく、その理由を次の如くいう。

是まで久しい間、(日本人の大多数は)さう形容詞の入用でない社會で生活して居たのである。同じ一つの事物に共同に接する場合で無くとも、一家一郷黨の感情の動きには殆ど意外なものが無く、従つて又互ひに心持がよくわかつて居たとすると、常の交通には形容詞を附加すべき必要がない。「そんな」や「あの様な」を無闇に使用して、前置きも説明もせずに済ますといふことは、或は外國では許されない文法かも知れぬが、我々は平氣で今でもそれを遣つて居る。

右の考えを飴玉よろしくしゃぶつているうちに、わたしは形容詞がすくなかつたのは「互ひに心持がよくわかつて居た」からではなくて、たがいに腹の底が知れないからこそではなかつたか、という疑いに突き当たつたのだが、そういう疑問を抱いてはまちがいだらうか。これもまた暴論の誇りをまぬがれないが、たとえば枕詞はその一例証ではないのか。塩舟はいつも帆を並べてくるとはかぎらないのに〈しほぶねの〉は常に〈並べ〉を修飾し、形容する。滝の瀬にも淀んだところがあるにちがいないのに〈たきつせの〉は必ず〈早し〉にかかる。飛び行く鳥